

KAZOKU

家族

II

火 刑

昭和二十五年

五月

二十

日

表紙イラスト

根無亮

新しい王国	
ソフィー	
パリの町	
バローネ	
海峡	
ソフィーの決心	
大ブリテン島	
ソフィーはかしこい	
バローネの恐れ	
ソフィーの幸運	
ユリの花の刻印	
ケンジントン公の館にて	
ウイリアム王の統治方法	
異端の福音書	
アンは弟が好き	

目次

9	話題になりつつある腕輪	61
14	ケンジントン公の家系	64
22	ユリの紋章(一)	68
26	ユリの紋章(二)	70
28	ソフィーの母	74
30	学者フレデリック感嘆する	80
32	ふとした言葉	85
35	レスター公の思惑	87
38	アンナの料理	89
40	母の消息	96
46	森の中のアーサー	98
48	朝食	101
54	フレデリックとシルヴィー	106
56	アーサーをみなが待っている	108
58	ソフィーのこと	110

ソフィーの母マチルド
 何の用だろう
 レスター公の館
 父の秘密
 ウイリアム王は語りはじめた
 マチルドの決心
 従兄弟
 ローマ教会の敵
 ソフィーの苦悩
 レスター公の知らせ
 わかりはじめた母親の消息
 母から派遣された信者
 別離、ソフィーと残された人々
 ソフィー、再び海を渡る
 広大な海
 商人イシュリン姿を現す
 大陸に上陸したアーサー
 大陸での最初の行程

188 184 180 178 176 166 158 155 151 148 145 141 138 133 129 121 119 115

小さな村で
 イシュリンの提案
 アンの心配
 旅の途中
 イシュリンの新しい商い
 ミカエルとマルコ
 アーサーたちの旅は順調
 ソフィーのやさしい語り
 ベネディクト神父
 大切な話
 旅の神父
 快適な旅
 小さないさかい
 森の小頭
 レナ
 黒い森の中
 再びユリの刻印
 バロワ伯はソフィーの父親？

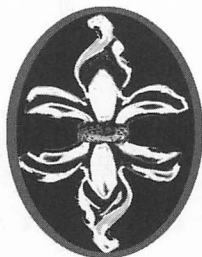
260 254 246 239 237 226 224 219 216 209 207 205 203 201 199 197 193 191

大陸を南下するソフイー一行	264
渡河	267
人買い？	270
神父と司祭と二人の商人	275
アーサー、パリに入る	282
流される	285
旧友	287
ソフイーを捜そう	290
ソフイー様ですか？	293
ソフイーの最初の情報	297
バローネおじさん	298
イシューリンの心配事	309
ミカエル、シモンを訪ねる	311
サラ	313
アーサーとバローネ	317
侵入者	322
ソフイーの旅は軽快	324
ソフイーは間近？	327
ソフイー、捕らわれる	329
恐怖	335
焦るアーサー	338
牢の中	345
突き止められた教会	347
バローネの決断	349
ソフイーを捜せ（一）	351
ソフイーを捜せ（二）	354
ジャンベール司祭	357
司祭の尋問	359
フクロウの知らせ	367
ソフイーの窮地	372
火刑	377
村の農家	385
わたしはどこにいるの？	390
わたしは多くの人に愛されている	393
さあ、南の地へ	398
あとがき	401

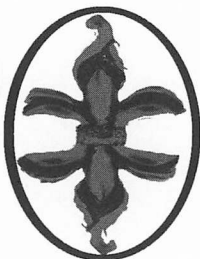
登場人物

- ソフィー
アーサー
ウイリアム王
リディア王妃
アン王女
ケンジントン公
モーリス
フレデリック
アンナ
レスター公
マリア
ベネディクト神父
マチルド
シルヴィー
ミカエル
- ブリトン国を訪れた大陸の少女
ブリトン国の王子で騎士
アーサーとアンの父
アーサーとアンの母
アーサーの姉
領主、王国の宰相
騎士、アーサーの友人
神学者、アーサーの友人
王妃の乳母、ケンジントンと共に暮らす
領主、森の親方
レスター公の妻
クリュニー修道院出身
ソフィーの母
フレデリックの妹、アンの友人
ソフィーの旅の案内人 信者

- マルコ
クロフォード
イシューリン
バローネ
ブラン
シモン
イノセント
ジャンベール司祭
サラ
クポー
レナ
バプティスト神父
小太りの神父
ポンス（レスター公の門番）
パウロ神父（マチルドから大ブリテン島に
派遣された神父）
ゴリオ（ルーアンの鍛冶屋）
- ソフィーの旅の案内人 信者
ケンジントン公の従僕、モリスの父
ジョン王統治時の宰相、現在は商人
イシューリンの従兄弟、商人、ソフィーと大ブリテン島に行く
信者、ソフィーと旅をする
ソフィーがパリで世話になった信者
パリの司教
リヨンの司祭
バローネ家の家政婦
森の親分
クポーの娘
旅の神父、ジャンベール司祭の友人
ジャンベール司祭に仕える神父
マルガリータ（宿の女主人、ゴリオの女房）
ヤン（水車小屋の粉引き）
ピエール（旅芸人）
バローネの部下



黒地に白いユリの刻印：アーサー



白地に黒いユリの刻印：ソフィー

新しい王国

アーサーが姉のアンを城館から救い出してから二年が経過しようとしていた。この二年の間、新しい王国は宰相ケンジントンを中心とした公議会こうぎかいによって統治されていた。公議会の構成員には領主、騎士、聖職者、それに農民、町民などの代表も加わり、その形態は周囲の国々とはまるで違った国家体制となり、まさしく前王ウィリアムが望んだ統治方法に近かった。

誰にもわかるような法律が明文化され公布された。聖職者や騎士、さらに文字の読める町人が得意げに城から出される布札を読み上げたりもしていた。多くの自由が住民に与えられた。町で暮らす人にも農地を耕すたが農民にもジョン王の治世のときよりはるかに低い税が課せられた。にもかかわらず、最初の年から豊作だったせいも、税の減少はほとんどなく、二年目からは多くなる傾向がみられた。働けば働くほど、麦をたくさん作れば作るほど農民は豊かになり、一人の農民が麦を作ると十人の村人を養うやしなことができると言われはじめた。麦を作る必要のない農家の息子や娘たちは町に出て働くことも可能になった。その結果、町は多くの人々であふれ、商いが盛んになるにつれて隣国からも新しい王国を目指して人が入ってきた。

隣国からの人の流入に関してはケンジントンは用心深かった。なぜなら、過去に隣国の兵により侵攻された苦い経験を知っていたからだ。そのため村民や町民の台帳も作成し、この国に暮らす住

民の増減に注意を払い、兵隊の数も増やした。海沿いの国で、デー人への侵入が多発していたので用心するに越したことはなかった。

二年前には、町や村にたくさんいた浮浪児たちは教会の施設に集められ、洗濯された身ぎれいな古着を着せられていた。これはベネディクト神父の提案でもあった。そして、身ぎれいな古着を着た子供にはきちんとした食事が与えられ、聖書の話と躰しづけがほどこされた。修道院の中の施設だったので、修道士たちがかわるがわる教える役を買って出たり、また村のおかみさんたちも子供たちのために食事を作ったり、服を繕つくろったりした。

レスター公の奥方マリアもベネディクト神父のこの提案に賛成した一人だったので、施設が機能しはじめると早速にも侍女たちをつれて子供たちの面倒をみはじめた。今まで森の中で自給自足に近い生活をしていたマリアにとって、レスター公の奥方という館の生活が物足りなかったことも理由だった。子供たちにとってはこわいお母さんの出現である。

年長の子供たちはよく脱走したが、よく戻ったりもしていた。しだいにこの建物は子供たちの家になっていった。ベネディクト神父もこの家に時々顔を出した。こわいお父さん役だが、どこか親しみがあつたので子供たちには人気者だった。

アーサーは十七歳に、姉のアンは十九歳になっていた。アンはますます美しい女性に成長し、ブリ

トン王国の幸せの象徴になっていた。アンの回りには半年前からシルヴィーとその兄フレデリックの姿があった。アンはシルヴィーに弟のアーサーを自慢したいと思っていたし、シルヴィーは学者になった兄のフレデリックを紹介したかった。フレデリックはパリの神学校出と言われ、初めてフレデリックを紹介されたアンはこれまでの重なる厚意に心から感謝した。

アーサーはシルヴィーやフレデリックが少し苦手だった。そのせいも、モーリスと時間を過ごすことが多かった。二人とも剣術、弓術、槍術の腕を一段とあげ、馬術の巧みさにはさらにみががかった。時に二人そろって、城館から遠く、王国の隅々まで視察に出かけることもあった。アーサーの馬を駆る姿はアンをうっとりさせ、アーサーが弟でなければいいのと思ったほどだった。

アーサーも姉のアンと一緒にいる時は心地よかった。アーサーから見ると姉は美しいだけではなく、愛らしかった。明るい金髪が形のいい額を柔らかく覆い、深い憂いを含んだ縁があった瞳、まっすぐな小鼻、微笑みとともにある小さな口元、口元からこぼれる白い歯はまるで輝く宝石のようだった。その魅力のすべてを駆使して姉のアンが自分にもせる信頼感に、アーサーは騎士としての喜びと使命感に満たされた。

「アン姉さん一駆けしようか」とアーサーはアンをよく乗馬にさそった。

「わたしを鞍にやさしく乗せてくれたらね！ アーサー」とアンは妹でもあるかのように甘えた。

アンの最大の苦しみを取り去ってくれた弟は、アンにとってかぎりない幸せをもたらしてくれた存在だった。アンとアーサーは最も幸せな時を過ごしていた。

アーサーはシルヴィーやフレデリックが嫌いというわけではなかった。なんとなく気後れしていたのかもしれないし、シルヴィーやフレデリックの語る言葉のひとつひとつからアーサーの知らない世界、自分がこれまで体験したことのない学問という世界が多く語られたためかもしれない。一方で、シルヴィーもフレデリックも次の王になるであろうアーサーに様々なことを知らせたかったのかもしれない。

アーサーはシルヴィーやフレデリックに比べるとはるかに自然児だった。しかし、シルヴィーやフレデリックにとつてはアーサーの人をひきつける魅力、様々な動物たちまでもがアーサーを慕う様子を見ることは驚くべきことだった。

大陸から商人と一緒にイシュリンを訪ねた神秘的な娘ソフィーも、十五歳になったばかりだった。ソフィーはつましくケンジントンとアンナに仕えた。おとなしく静かな立ち居振る舞いは、その黒く長い髪とともに美しく清楚せいそという言葉が似合う乙女だった。

アーサーから「ソフィー、可愛いね、毎日楽しいかい？」と言われると白い頬ほおがぼつと赤らんで、その時はいつになく大人っぽく「アーサー王子さまこそ、いつもお元気で何よりです」と生真面目な

返事を返すのが常だった。

ソフィーはケンジントンのもとの規則的な生活のせいか、すでに健康を取り戻していた。体が丈夫になることは、ソフィーの強い希望でもあったし、さらにうれしいことに、この二年の間に背がかなり伸びたこともひそかな喜びとなった。

いつの頃からか、アン王女を中心とした若者のグループができあがりつつあった。シルヴィーやフレデリックは当然のこととして、アーサーといつも行動を共にする、騎士となったモーリスも参加した。これにソフィーが加わり、その他にはジャン修道士も呼ばれることもあった。ジャン修道士は新米の神父になっていた。ベネディクト神父を助けながら、ときどき城館にやってきたが、相変わらずよく気の利く若者だった。グループは無理なく、正しく、未来を語ろうというものだった。おそらくは、学者フレデリックがグループをリードしてゆくとは思われたが、グループの中では誰もが平等だった。

ソフィーがおおずおおずとアーサーとモーリスに連れられてグループに入るようになったとき、アン王女が最初にソフィーを抱きしめた。アンには妹ができたようだった。ソフィーは恐縮しつつも熱い涙が頬を伝わるのを感じていた。アンはソフィーの感受性の豊かさに驚き、アーサーに片目をつぶって知らせると、ソフィーの手を取ってシルヴィーやフレデリック、ジャン神父に紹介した。個性豊かな若者たちが未来を語りはじめた。その前にソフィーの生い立ちを語らなければならない。

ソフィー

ソフィーは暗い闇ぐみの中を腕を引かれて大きな城から逃れる記憶がずっとあった。六歳くらい記憶だった。暗い闇の中を逃れる光景は、その後、夢の中に時々現れることにもなった。この暗い闇ぐみの恐怖はソフィーの幼年時からのトラウマとなっていた。

母と思われる人を中心に、何人かの男たちが押し黙ったまま深い森から森へ逃れて行った。誰から逃れたのかはソフィーにはその時はわからなかった。

やがて、明け方、石でできた大きな水道橋にかかる大きな川の川縁かわべりにまで来た時、一同はようやく安堵あんどしたようだった。川沿いをしばらく歩き、やがて川縁から続く森の中にある一軒の家を見つけると、誰もが安心したかのように歩みをゆるめ、お互い抱き合いつつ無事を確認し、やがて、ゆっくりと家の扉を叩いた。そこには年とった夫婦がいたのだが、訪問者たちは老夫婦と親しみにあふれたあしさつを交わした後、低い声で話しはじめた。

やがて、その日の夕食が用意され、一同は神に感謝をささげたあと、パンをスープに浸しながら食べはじめた。どういうわけか、ソフィーはその様子をかなり克明に覚えていた。

夕食後、母と思われる女性がソフィーに、ベットに入ってゆっくりお休みと言った。大人たちはその夜、さらに長く話をしていたようだったが、翌日ソフィーを残していずこかへ立ち去った。

朝、大人たちがいないとわかるとソフィーは母と思われる人たちの後を泣きながら追ったが、涙の

痕だけが頬に残った。老夫婦はソフィーに温かい朝食を出した。

前日、ソフィーをベッドに寝かせる前、母と思われる女性はソフィーの額に接吻をし、やさしく抱擁した後、ソフィーの細い腕に腕輪を残した。

「この腕輪を大切にね、ソフィー」という言葉が思い出され涙が瞳を濡らした。その時、ソフィーは翌日一人で残されるとは思わなかったので、「ありがとう、大事にするわ」と言うとそのままだを閉じたのだった。

老夫婦はソフィーの祖父母だった。突然、実の娘マチルドの子供を預かることになった老夫婦は、何も言わずに孫のソフィーを預かった。

祖父母の住む森の近くには、数百年前、ローマを都とする帝国が卓越した技術で築き上げた水道橋があった。それは大きな水道橋で、下を流れる川から見上げると、人間がよくもこのように大きな建築物を造ることができたものだ、ソフィーは子供心にも感嘆したものだ。しかし、祖母は絶対に橋の上に登ってはいけないうとソフィーに言った。

大人でさえ橋の上に立つと、両手を広げて鳥のように飛び立ちたい衝動にかられるらしかった。時に、大きな鳥が橋脚の間を抜けて飛んでゆく様を見ると、ソフィーは一度でいいから空を飛んでみたいと思うのだった。

祖父も祖母もソフィーをことのほか可愛がった。時がたつにつれ、母と思われる女性のことをソフィーはあまり思い出さなくなった。

七歳になったとき、祖父母は聖書を手に取りソフィーにゆつくりと話しはじめた。あとで気がつくことになるが、家の奥まった部屋には布に描かれたキリスト像があり、キリストを見守るかのような二人の女性の肖像も描かれていた。この家はソフィーの目から見ると、まるでこの画布を中心に廻っているような感じがした。なぜなら、この家にはときどきこの画布のキリストに礼拝する人々がいたからだ。彼らは時に祖父母に衣類や食べ物を持ってくることがあった。

ソフィーたちの家は森の中にあつたので、周囲に人家もなく、ソフィーには友達といえる子供はいなかつた。時々、子供を連れて礼拝に来る人々もいたが、決まって親たちは子供にソフィーお嬢さまと遊びなさいと氣遣かつた。ソフィーはそんなときは仲良く遊ぶのが常だつた。

やがて礼拝が終わつて、両親と一緒に帰る子供たちを見てみると、ソフィーの頬には自然に涙が伝わつた。なぜだかはわかつていたが口に出すことはできなかった。おじいちゃんやおばあちゃんを悲しませることなんかできないもの、と心に言い聞かせるのだった。

森の中ではあつたが、ソフィーたちの住む家の回りには小さな庭があり、春には様々な花が咲き乱れた。また、初夏には野のユリも庭で咲いた。祖父母は特にこのユリを大切にしていた。

「ソフィー、このユリは素敵でしょう」と祖母が言つた。

「わたし、お花はみんな好きよ、おばあちゃん」

「わたしもお花はみんな好きよ、ソフィー」

そうは言っても、ソフィーは特にユリの花を大切にしていた。それは六歳の時、母と思われる人がソフィーの腕に残してくれた腕輪の中に刻まれていたからだった。

「おじいちゃん、おばあちゃん、わたしがここに来たとき、いっしょにいた女の人はわたしのお母さんなの？」

「マチルドかい。そう、わたしたちの娘だよ。だからソフィーのお母さんだね」

「お母さんはどこに行つたの？ もう、ここには戻らないの？」

「もうすぐ戻ると思うよ、ソフィー。だって、お母さんは家を出てからもう二年になるものね」

「ほんと？ お母さんはもうすぐ戻ってくるの？」

「お前のお母さんは、出かける時ソフィーを少しの間預かってちょうだいと言っていたからね」

「本当なのね？ おばあちゃん」

「本当だよ、ソフィー。さあ、お母さんが早く帰ってくるようにイエスさまとマリアさまにお祈りしてからベッドに入ろうね」

「わかったわ、おばあちゃん」

そのような話をしてから、祖父母の娘マチルドが家を発つてから七度目の夏を迎えようとしていた。最初のうちは、「お母さんはどうしたんだろうね、遅いね」と言っていた祖父母も、しだいに娘のことに関して言葉が少なくなってきた。

しかしながら、その母の消息が再びわかりはじめた。それによると母はパリという大きな町の城外に住み、仲間との共同生活を営んでいるようだった。

ソフィーは今は十三歳になろうとしていた。お母さんはわたしのことなど忘れてしまっているわ、と思いつつ、久しぶりの母の存在を知ることはいれしいことだった。ソフィーは華奢ではあるけれどあまり病氣もせず、丈夫に育ってきた。ときどき、祖父や祖母に連れられて町に出かけることもあり、最近では町に行くことがかなり好きな少女になっていた。「ソフィー、今日はスカーフを一枚たのんであげよう」と言われると、すなおにうれしさがこみあげるのだった。

相変わらず朝と夕に祈りをささげ、聖書を暗唱したり、祖母と一緒に繕い物をしたり、編み物を習ったりして日々を過ごしていた。特に祖父から聖書を通した歴史の話をきくことが大好きだった。祖父は様々な神が出てくるギリシャの神話も話ってくれた。また、祖父が若い頃旅をして見聞きした国や都市のことなども話してくれた。ソフィーは想像力を駆使して歴史や神話の中で遊ぶことができた。ソフィーにとって平穏な日々が続いていた。

その平穏な日々突然嵐が吹きはじめた。

その日、ソフィーの家で礼拝らいはいをする人々のうち数人があわただしくやってきて、祖父母と話しはじめた。

「この家から逃れなければならないのか」と祖父の声がした。

「おそらく。奴らは必ずやってくる。お二人がマチルド様のご両親とわかったのかもしれない」と一人の男が言った。

「だから、掴つかまれば拷問ごうもんが待っていることは確かだよ」と別の男が吐はき捨てるように言った。

「拷問は年寄りや子供にもですか？」と祖母が震える声音こゑで質問していた。

「マチルドさまのご両親とお子さまとなればいっそう危険です。特にソフィーさまは危険すぎます。とにかく今は逃げるのが一番だと思えます」

「でも、わしらは年寄りだし、逃げるほどの体力も気力もないよ」

「でも、神父さま、ここにいたらほんとうに危ないよ、奴らは拷問しながら改宗をせまるよ」

「彼らは本当の神の心がわかっていないんだ。哀れな連中だ」

「わしらもそう思う。奴らは心の中までも支配しようとしているんだ」

「そんな話は今に始まったことじゃない。もう何度も話していたことじゃないか、とにかく切羽せうはつまっているんだよ、逃げる決心をするか否かだよ」

「わたしたちはどうなってもいいんだけどね、ソフィーのことがとても心配なんですよ、ソフィーは大きくなったとはいえ、まだ子供だから母親にどうしても会わせたいんですよ」

「マチルド様の消息はその後あったのかね？」

「マチルドはどうもパリの近郊で布教しているという知らせがあるんだ」

「それはよかった、マチルド様が無事なら、パリまで遠いけれど、ソフィー様をマチルド様のもとに届けるのが一番ですよ」

「マチルドこそ、奴らが捜しているんだよ。それにマチルドのところまで誰が連れて行くのかね」

「パリまで行商に行く仲間を知っているので、彼に頼んでみます。とにかく急がねばなりません。危険がせまっています」

「できることなら、わしとばあさんは北でなく南に行きたい。わしらは南のほうが土地勘があるし、それほど長くは生きられないから、海辺の暖かい土地で暮らしたい。ここでも十分に南なのだが、ここが危険と言うのなら、マリアさまが海から上陸したサン・マリー・ドウ・ラ・メール（海の聖マリ）村の近くまで行きたいと思う」

「神父様がそうおっしゃるなら、わしらは必ずサン・マリー・ドウ・ラ・メール村までお連れします。ここより多くの信者がいますからきつとご安心いただけます」

ソフィーは大人たちの話を隣の部屋から聞いていたので、祖母がソフィーの部屋のドアをノックするのがわかっていた。ソフィーはそのとき無性に母親に会いたくなっていた。祖母がソフィーにことのしだいを話し終わった時、ソフィーは「お母さんに会いたい」と言った。

祖母はソフィーを抱きしめた。そして「マチルドはわたしの娘、ソフィーはマチルドの娘、だから当然だね」と言いながら、「おじいちゃんもおばあちゃんも一生懸命生きるから、ソフィーもお母さんに会えるまで身体に気をつけて頑張るのよ」と涙を流した。

「おばあちゃん、わたしはお母さんを見つけて、またおばあちゃんやおじいちゃんと暮らせるように頑張るから、それまで長生きしてね」と祖母を抱いた。

祖母はソフィーを連れて、祖父たちのいる居間に入ってきた。そして、ソフィーの決心を伝えた。祖父はキリストと二人のマリアが描かれた画布を大切そうに折り畳んだ。画布に描かれたキリスト像はこのような事態に備えて布に描かれたのかもしれないなかった。

ソフィーは一人の信者に、パリまで一緒に旅をする行商人のいる村まで連れて行かれることになった。行商人は祖父と同じ教えに帰依していたが、パリへの旅は久しぶりのはずだった。

パリの町

ゆったりと流れる大河の中州を中心に栄えはじめた都市、パリ。その近郊の森に母親のマチルドがいると思われたが、期待は裏切られた。ソフィーを連れてこの地までようやくたどり着いた行商人は、とりあえずパリの外れにある知り合いの家に荷をほどいた。そして、「ソフィー様、落胆することはありませんよ。明日からおじさんがお母さんの消息を聞いてまわるから」とソフィーを勇気づけた。それから、あらためてソフィーにこれからは信者以外の人がいる時は「ソフィー様」ではなく、単に「ソフィー」と呼ぶようになるよと伝えた。ソフィーは「そのほうがうれしい」と答えた。

そして、行商人はしばらくの間はこの知り合いの家に泊まることになる。ソフィーに伝えた。「おじさん、この家には小さな子供がいるから、わたし、子供たちの面倒をみる事ができるわ」とソフィーは行商人に言った。行商人は「この家にはちゃんと宿賃を払っているから働く必要はないけどね」と答えたが、「ソフィー様のお気持ちですからお好きにしてください。おかみさんも喜びます」と付け加えた。そして次の日から行商人はソフィーの母、マチルドの消息をパリの町および近郊に尋ねはじめた。

行商人はパリ周囲の村をことごとく尋ね歩いたが、これといったよい情報は得られなかった。そうこうするうちに、行商人はやつのことで行商人と同じ教義を信じる信者たちに巡り会った。それはまったくの偶然な出来事からわかったことだった。パリの西門近く、城壁の外に点在するある家に、

信者とおぼしき老若男女ろうじやくなんにょが消えていったが、行商人は人々の発する匂いで自分と同じ教義を信じる人たちだと直感した。

その家から立ち去る一組の家族が確認されると、行商人は家族が出てきた家の扉を叩いた。家の中から、家族を送り出したばかりの家長と思われる男が戸口に現れたが、行商人が教義のつとつたあいさつをすると、男も同じあいさつを返して来た。男はやはりこの家の家長で行商人と同じ信者だった。そして、しずかな声で行商人を家の中に招き入れた。

行商人はことのしだいを家長に話した。家長は非常に驚き、ぜひ、ソフィー様をお連れしてほしいと言った。

行商人が翌日ソフィーを連れて行くと、家長はじめ、家の人々がみなソフィーに丁寧なあいさつをした。家長はマチルドのことをかなりくわしく知っていた。さらに「マチルド様」とやはり敬語を使った。ソフィーは自分のことも含め、「様」がつく理由がわからなかったが、母に会えるのではという期待が増した。

しかしながら、ソフィーの期待に添うことはなかった。パリでも異端いたんのキリスト教徒に迫害はくがいがせまられ、身を隠す信者と別の土地に逃れる信者がいるとのことだった。家長自身もまもなく身を隠さねばと思っていると話した。そして、マチルド様は逃れるというより布教に行きたい土地があり、大ブリテン島を目指すと言って北に向かったということだった。パリを流れるセーヌ川を舟で下り、おそらくはルーアンという都を経由して、海を渡ったのではと家長は言った。そして、以前マチルド自身か

ら聞いたことのある大ブリテン島のブリトン王国に向かったのではないかと言った。

この知らせを聞いた行商人は、ソフィーに「海を渡ることは時として遭難まうなんも考えられるつらい旅になると思うが、どうしたいですか？」と聞いた。

「おじさんさえよければ、わたしは母さんに会いたい」とソフィーは答えた。行商人はしばらく考えていたが、やがて重々しく口を開いた。

「わたしはソフィー様を大ブリテン島まで送り届けることはできない、というより自信がない。わたしはその国に一度も行ったことがないので、ソフィー様を無事にお母さんに会わせる自信がない」と申し訳なさそうに言った。

「おじさん、でも、ここからおじいちゃんたちのいる南の地まで行くのも大変だから、同じ大変ならわたしはお母さんのところに行きたい」と答えた。

行商人は、再び深く考えてから、「ソフィー様、もうしばらく待つてくれませんか？ いい考えが必ずあるから」と言い添えた。

数回の訪問により、行商人ブランドンは訪ねた家長シモンとかなり親しい間柄になっていた。シモンも、ソフィーを大ブリテン島にいると思われるマチルドのところまで無事送り届けられるかを真剣に考えはじめた。同じ教えを受けている信者が連れて行けたら一番いいことは確かだ、しかしシモンの知る信者の中に見つけることは不可能に思えた。そのような時、幸運にも、大ブリテン島の王国の一つで宰相をしている従兄弟いとこに会わなければならない商人がいるということを知りつけた。早速シ

モンは行商人ブランを連れて、商人がいると思われる宿屋に出向いた。

宿屋の主人は、その男は夕方には戻ってくるが今はいないと言った。

「すまんが、その男はどんな男だい」

「三十代かな、中肉中背のたくましい男ですよ。長旅をしているみたいで、町や村では宿屋に泊まるが、野宿もすると言っていたかな」

「でも、旅人の野宿は当たり前だしね。彼はどこに行こうとしているかわかるかい」

「夕方戻るから直接聞いたらいよいよ」

「ありがとう、ご主人。それでは夕方にもう一度来るから、わしらが来たことを伝えといてくれな
いか」

「わかったよ、旦那方の名前は？」

「わしはシモン、彼はブラン、でも、泊まっている御仁ごじんはわしらのことは知らないよ」

「わかったよ、それじゃ夕方だね」

「よろしく、それでは日が暮れる前に」

バローネ

その日の夕方、ブランとシモンは大ブリテン島に行くかもしれないという商人に会った。宿の主人が言うように中肉中背のたくましい男だった。大陸東部の出身ではないかという風貌ふうぼうをしていたが、「わたしに御用とは？」と尋ねてきた。

「突然お訪ねして申し訳ない、わたしはシモン、彼はブランという、わたしはこの住民だが、ブランは南の人で行商をしている」

「わたしはバローネ、東の出身でブランさんと同じ商いをしている」

「それではお聞きします。バローネさんはこれから大ブリテン島にいらっしゃるといふことは本当ですか？」

「本当です」

「十三歳の娘を一人お連れいただきたいのですが、無理でしょうか？」

「大ブリテン島のどなたのところまで？」

「娘の母親の所まで、お礼はできるだけだけいたしますが」

「それは無理ですね。よくお考えください。わたしも大ブリテン島には行ったことがあります。それに聞くところによると、大ブリテン島は島といつてもとても広いのです。今はイングランド王国が統治していますが、統治力が弱く乱れているそうです。娘さんの母親がイングランド王国のどこにい

らっしゃるのかおわかりですか」

「正確にはわかりませんが、イングランド王国ではなく、ブリトン王国にいるはずなのですが」

「ブリトンですか？　ブリトン国はケルト系のブリトン人の国と聞きます。驚きました、偶然ですね、わたしもその国を目指しています。わたしの父が病になり、死ぬ前に甥おひいに会いたいと言うのです。彼は今、ブリトン王国の宰相をしているとのことですので、彼が大陸まで来てくれるかわかりませんが、わたしは父が生きているうちにぜひ会って欲しいと頼みに行くところなのです。ですから、王国までは同行できますが、わたしはすぐに大陸まで戻らねばなりません。つまり、お連れすることはできませんが、彼女の母親を捜すことは無理なのです」

「よくおっしゃっていただきました。バローネさんは誠実なお方であることがよくわかりました」

「わたしは、娘さんをお連れできませんが、もし、ブランさんがこれまでどおり、娘さんと一緒に娘さんの母親をお捜しになるのなら、ブリトン王国まで一緒にしてもかまいません」

「本当ですか、わたしはその地に行つたことがなかったのですが、不安のあまり、娘にそこまでは行けないと言つてしまいましたが、再考できると思います」

「そうですか、わたしたちは二人連れですが、明後日には出発しますから、その時はご連絡ください」
 行商人のブランがことのしだいをソフィーに告げ、前言を変えてソフィーを大ブリテン島の母親のところまで連れて行くと言つた時、ソフィーは幸運に感謝した。

大ブリテン島に向かうバローネ一行は、大陸と大ブリテン島の間にある最も狭い海を渡ることにしたので、セーヌ川を船で下る方法をとらず、パリから北西に向かつての旅となった。馬に乗ったり、歩いたり、時には小舟に乗ってパリから北西へ北西へと星をたよりに旅をした。大きな森を抜け、大の川を下ったり、横切ったり、丘を上ったり下ったりと初めて歩む土地はすべてが未知の土地だった。

クマやオオカミが森の中を跋扈ぼっこしていたので、野宿には危険がともなった。また夏であっても冷たい風が吹くこともあった。獣けものからの危険と容赦ようしやない自然の猛威もうい、一行はそれらすべてと戦わなくてはならなかった。

海に面した小村によろやくたどり着いた一行は、北の海を目のあたりにした。バローネさんの地図には大ブリテン島に行くためには海岸線をさらに北に上り、一番狭い海峡を舟で渡る方法が記されていた。そして、土地の漁師に舟を出してもらおうように書かれていた。

潮しほの流れを計算に入れた大ブリテン島まで渡る浜まで来たが、すぐに海峡を渡ることではできなかつた。海が荒れていたこともあったが、誰もがひどく疲れていたこともあり、一行は海に面した小さな漁村に逗留せざるを得なかつた。

体調を整え、三日ほど待った後、舟は出された。海に比べると舟の小ささがあまりにも心もとなく、ブランもパローネもソフィーまでもが不安の中にあつた。浜から出てからまもなくして舟は大海の波浪にほんろうされはじめた。帆走に加えて四人の漁師が櫓を漕いでいたが、声をかけ合いながら力強く櫓を漕ぐ様子を見ると、旅人も安堵するのだった。

大ブリテン島の白い断崖があなたに見えるはじめてきたころ、突然、海が暗くなり、やがて突風が吹きはじめた。風の強さに漁師たちの表情が変わりはじめた。「気をつけろ」という声が放たれ、さらに櫓の早さが増すと、白い断崖はどんどん近づいてきた。「もう少しだ、頑張れ」と叫ぶ船頭にあたる漁師が声をかけたすぐあと、大波が小舟を襲った。

全員が海に投げ出された。ソフィーは漁師の一人に救われた。しかし、行商人のブランとパローネの召使いの姿は再び見ることができなかつた。パローネは船からはずれた櫓につかまりながら自力で岸に泳ぎ着いた。ソフィーとパローネと四人の漁師のみが生き残った。

漁師が急いで火を熾し暖をとれるようにした。海水は冷たく、みな震えていた。やがて少し暖まるとパローネはソフィーに「ブランさんは亡くなったと思う、この先はわたしについてくるかい」と尋ねた。ソフィーはうなずいた。寒さと死の恐怖から逃れたばかりのソフィーの思考力は止まっていた。

ソフィーの決心

行商人のバローネは海に投げ出されたにもかかわらず、金貨の入った袋を失うことはなかった。商売人のしたたかさというべきか、そのおかげで気持ち滅入ることは最小限に抑えられた。しかしながら、同じく海に投げ出されたソフィーは風邪を引いたのかその晩から熱がでた。食欲もなくなり、バローネは心配して宿をとり医術者を捜した。医術者というより町の年寄りがやってきて、娘さんはお腹がやられているので温かい飲み物を与えるように、そして温かくして休ませるようにと言った。

漁師町でしばらく滞在することは、バローネにとっても体力の回復をもたらすのに好都合と思われた。しかし、傍らで熱を出して眠っているソフィーを見ると、バローネはブランがいなくなつた今、少女をブリトン王国まで連れて行つたあと、どうすればよいかわからなかつた。突然、少女から頼られる立場に立たされたバローネは、少女の回復を待つて、まずはこのことを話し合おうと思つた。

風邪と疲れがソフィーの体力を奪つたが、三日もするとベッドから起き上がることができた。バローネは先を急いでいたが、少女をひとりにするわけにはいかず、それに漁師たちに聞いてみると、バローネの目指す王国は大ブリテン島の中心より北に位置するらしいこともわかつた。この町から出かけてもおそらくは馬に乗つても二十日はかかると言つた。ソフィーの体調も長旅に耐えられるか確証はなかつたが、これ以上留まるわけにもいかなかつた。

「ソフィー、また旅が始まるよ。おじさんが行くところにソフィーのお母さんもいるといいけどね」
「そうね、でもおじさんは従兄弟いとこの人に会いに行くんでしょ。そして用事が終わったら大陸に戻ってしまふのよね」

「そうなんだ。ごめんな、ソフィー。で、気分はどうだい？」

「だいたいいいわ、旅は大丈夫よ、バローネおじさん。またご迷惑をかけてしまうけど、向こうに着いたら、わたし一人でお母さんを捜すわ？」

「ソフィーはえらいね。向こうに着いたら、その時決めたらいい」

「はい、おじさん。それでいつ出発するの？」

「明日の朝には出かけよう、ソフィー」

黒く長い髪をしたソフィーにバローネは神秘的な美しさを感じた。大人になれば、透明な美しさを持った聖母のような女性になるのではと思えたほどだった。

大ブリテン島

この大ブリテン島ではバローネにとつても困ったことがあつた。それは海辺にある漁師町にいるときからわかっていたことだけれど、ときどき言葉がスムーズに伝わらないことだつた。大陸と大ブリテン島では言葉が違つていた。そこでバローネは漁師町で両方の言葉のわかる従僕じゆうぼくをやつた。

バローネ自身も言葉を理解できないことは大きなハンデになるとわかつていたので、従僕にもなるべく大陸の言葉を使わないように指示し、少しでも新しい言葉に接して理解しようとなつた。

この点に関しては、ソフィーはあまり関心を示しているようには思えなかつた。ソフィーはおとなしく、静かな少女だったので、言葉に関して感心があるかどうかはわからなかつた。ただ、ソフィーはこの新しい土地での言葉に興味を持つていたかもしれないなかつた。なぜなら、従僕がバローネにブリテン島の言葉を使うとき、耳をすまして聞いているようだつたから。

バローネは三頭の馬を手に入れた。一頭に荷物を載せ、一番丈夫そうな馬にバローネとソフィーが乗つた。従僕は三頭目に乗り先導した。大陸の旅と同じように、川を横切り、沼をわたり、森をぬけ、できるだけ大きな道を選びながら進んだ。時々すれ違ふ旅人もいたので、覚えてたの言葉を使つてあいさつもした。従僕になつた男は道をよく知つていた。

いくつかの村や町で泊まつた。その中には大きな修道院のある町もあつた。街道では馬を飛ばす兵